様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 ２２ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ００４１４

研究課題名（和文）ディケンズ、「ヴィジュアル・ノヴェル」、アダプテーション

研究課題名（英文）Dickens, "Visual Novel," Adaptation

研究代表者
佐々木　徹（Sasaki, Toru）

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：３０１７０６８２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は、ディケンズの小説作品と、「ザ・ワイヤー」をはじめとする最近のテレビドラマに見られる「ヴィジュアル・ノヴェル」というコンセプトとの関係を考察することであった。
　研究成果として、「ザ・ワイヤー」を現代版『荒涼館』ととらえる口頭による国内研究発表を行い、『荒涼館』に関する2本の論文と『デイヴィッド・コパフィールド』に関する論文を国際的な学術誌に掲載し、歴史テクストのアダプテーションに関する論文を国内で発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　日本国内では、現代アメリカのすぐれたテレビドラマに関する文学的な考察はまだ進んでいないようなので、本研究はこの点で新しい研究領域を開いたと言えよう。
　本研究の成果として発表した、国際的な学術誌に掲載したディケンズの小説作品に関する3本の論文はいずれも極めて独創的な内容を含んでおり、国際的なレベルで十分通用する日本人による英文学研究として価値あるものと自負している。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research project was to study the relationship between the concept of "visual novel" and the novels of Charles Dickens. I have produced, as a result, one paper orally delivered on the TV drama "The Wire" and Bleak House, two articles on "Bleak House," an article on "David Copperfield," in international journals, and an article in Japanese on the adaptation of historical texts.

研究分野：英文学

キーワード：Visual Novel　Dickens　Adaptation　TV Drama

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

（１）本研究は、現在まで３回科研費を受けて行ってきた一連のアダプテーション研究を継続するものである。これまではディケンズの小説と映画のアダプテーションを中心に考察してきたが、「ザ・ワイヤー」のシナリオ・ライター、デイヴィッド・サイモンのインタビュー記事（2 April 2009, *Daily Telegraph*）を読んだ時に、近年特に見るべきものが多い長編テレビドラマにディケンズとの接点があることに気づき、本研究を着想するに至った。

（２）「ザ・ワイヤー」についてはすでに *The Wire: Urban Decay and American Television*（ Bloomsbury, 2009）、*The Wire: Race, Class, and Genre*（University of Michigan Press, 2012）、*The Wire and Philosophy: This America, Man*（Open Court, 2013）といった研究書が著されているが、ディケンズとの関係を掘り下げ、精査した論考は未だ世に問われていない（前者に収録されたアマンダ・クラインの論考はディケンズをタイトルに掲げてはいるが、内容としては教科書的な概説にとどまっている）。

（３）研究代表者は、英文学研究において日本人が英米の学者に負けない成果を生むにはテクストの精読が一番の近道であるとの信念に基づき（佐々木徹「今、日本で、英文学にどう取り組むか？」2017）、これまでに国際学会の研究発表を 2 回、招待講演を 3 回行い、英米で発行される国際誌に 10 本を超える論文を掲載し、8 冊の共著、編著を英国で出版している。アダプテーションに限っても 3 本の論文を国際的な場で発表した。就中、2015 年の “Dickens and the Blacking Factory Revisited”は英国で最も権威ある学術誌 *Essays in Criticism* に掲載された。今回の研究成果も、後述するように、この分野において学会をリードする海外の専門家のレビューを受け、精度を高めた上で、国際学会や国際的な専門誌において世に問う。

（４）研究代表者は『荒涼館』（岩波文庫、2017 年）の翻訳・校正作業を終えたばかりで、この小説を細部にいたるまで理解しており、原作とアダプテーションの比較をおこなうには理想的な状態にある。また、上述したエスターの語りについてのオリジナルな仮説を、2017 年 11 月 22 日に連合王国レスター大学で行われる“Celebrating Dickens”と題されたパネル・ディスカッションで公表する予定である。本研究に研究分担者はいないが、ディケンズ全般については *Charles Dickens*（2009）の著者マイケル・スレイター（ロンドン大学名誉教授）、ディケンズと週刊誌「家庭の言葉」については *Dickens the Journalist*（2003）の著者ジョン・ドルー（バッキンガム大学教授）、テレビドラマ関係のアダプテーションについては *Henry James and Revision*（1990）の著者で *Daily Telegraph* 紙の DVD 評を担当していたフィリップ・ホーン（ロンドン大学教授）の三氏にレビューを依頼する予定であり、既に内諾も得ている（一度の海外出張で効率よく全員に直接指導を受けることができるよう考慮して、ロンドン近郊に在住している方ばかりを選んだ）。

２．研究の目的

本研究は、研究代表者が科学研究費補助金を得て継続的に実施してきたチャールズ・ディケンズを中心とする英語圏小説に関するアダプテーション研究、すなわち、平成 21 年度から 23 年度にかけての「ディケンズとアダプテーションに関する考察」（H21～23）、「小説から映画へ—『アダプテーションの詩学』構築に向けて」（H24～26）、「アダプテーションとしての歴史小説ならびに歴史のアダプテーションに関する考察」（H27～29）の三つの研究に基づき、これまで蓄積してきた小説から映像へのアダプテーションについての考察を深化させるとともに、研究対象を「ザ・ワイヤー」をはじめとする最近のテレビドラマに見られる「ヴィジュアル・ノヴェル」というコンセプトへと拡大し、ディケンズを軸にして言語表現と映像表現の関係を探究するものである。

３．研究の方法

1970 年代からテレビ批評家の草分けとして活躍してきたクライヴ・ジェイムズは近著 *Play All* (Yale UP, 2016)において、近年のアメリカのテレビ文化を考察する中で、現代を "this amazing era of creativity"(12)と表現し、ケーブルテレビの長時間ドラマの優秀性を力説する。このような認識は彼だけのものでなく、たとえば、1999 年の HBO の「ソプラノ一家」（*The Sopranos*）と「ザ・ワイヤー」を起点とするケーブルテレビのドラマの勃興を念頭に置いて、ジェイムズ・マクナマラは現代を「テレビの黄金時代」と呼ぶ（“The Golden Age of Television,” *Australian Book Review*, April 2015）。さらに、2015 年に「ロサンジェルス・タイムズ」紙のメアリー・マクナマラ、次いで 2016 年に「ニューヨーカー」誌のエミリー・ナスボームという二人のテレビ批評家（どちらも連続テレビドラマについてよく記事を書いている）がピューリッツアー賞を受けたという事実は、テレビドラマの質の向上に伴って、その文化的意義が認知されたことを示しているだろう。ピューリッツアー賞受賞に貢献したナスボームのエッセイ、 “When TV Became Art”（*New York Magazine*, December 2009）は、21 世紀初頭のテレビドラマを概観したうえで、「ザ・ワイヤー」をその中心に置き、やはり、この作品を「ディケンズ的」と形容している。

本研究においては、このように、芸術性と文化的意義を有するものへとめざましい発展を遂げつつある連続テレビドラマの全容を捉えるべく、できるかぎり多数のドラマを視野に入れるが、精密な考察の対象は「ザ・ワイヤー」に絞り込み、「ヴィジュアル・ノヴェル」とディケンズの関連性を、この作品のどこが「ディケンズ的」なのか、とかく安易に用いられるこの語の持ち得る意味を厳密に吟味しつつ、詳細なテクスト分析を通して具体的に追究することを第一の目的とする。

また、本研究においては、雑誌編集者としてのディケンズに注目してみたい。「ザ・ワイヤー」の場合もそうだが、テレビドラマの多くは原案を作成した人がすべてのエピソードのシナリオを書くわけではない。はじめの数回をその人が担当し、あとは、そうして設定された枠を尊重しながら、4，5名ぐらいのチームで書いていくのが普通である。こういう仕事の進め方は、実は、ディケンズが「家庭の言葉」や「一年中」といった自らの週刊誌で、Dickens's Young Men と呼ばれるエドマンド・イェイツやジョージ・オガスタス・サラなどの若手ライター達を相手に行っていたプロセスとよく似ている。こうした、「ザ・ワイヤー」のテクストと制作プロセスにおけるディケンズの影響に関する考察はきわめて新鮮な研究分野を開拓することになるだろう。

本研究の第二の目的は、ディケンズの小説『荒涼館』についての作品分析ならびにそのテレビ版アダプテーション（1985, 2005）に関する考察である。『荒涼館』の語り手であるエスターは、今まで様々な角度から論じられてきたが、なぜディケンズが彼女に物語の半分を語らせ、残りの半分を全知の語り手が担当するという小説史上きわめて稀なテクニックを使ったのか、という問題については答えがないまま今日に至っている。だが、上でふれた、ディケンズの編集していた週刊誌「家庭の言葉」との関連で考えてみると、この謎にひとつのまったく独創的な解答が見えてくる。丁度、『荒涼館』を構想している時期に、ディケンズは同誌に掲載予定の複数寄稿者を招いて共同執筆するクリスマス物語について頭を絞っていたのである。そこで、自分が書く小説のことを考えた時に、言うならば、エスターを寄稿者として招待し、共同執筆することを思いついたのではなかろうか。

『荒涼館』はサイレント期以後劇場用映画になっていない。なにしろペーパーバックで 1000 ページになんなんとする大長編であるから、通常の商業映画の 2 時間枠には到底おさまらない。テレビドラマはこの点、たっぷり放映時間があるので、はじめて「まともな」アダプテーションが可能になる場を提供した、と言ってもよいであろう。1985 年版も 2005 年版も高い水準の作品だが、前者が遅々として進行しない大法官裁判所の訴訟、ならびにこれを恰好の金蔓とする弁護士たちの狡猾さを強調し、拝金主義が力をふるっていた当時の風潮を批判することに力点を置いていたのに対し、後者ではエスターが物語の中心にあり、彼女の人間としての成長が、社会批判よりも前面に出ている。

上で触れた「語り」の問題はアダプテーションのプロセスにおいて、大きな問題となる。複数の語り手を映像で一体どう表現するのか？　テレビドラマではどちらもヴォイスオーヴァーを避け、一人称の語りを再現していない。だが、エスターに力点を置く 2005 年版は、単に彼女の出番を多くするだけでなく、彼女の視点を採用した主観ショットをより多く用い、彼女を中心に置いた画面構成を多用する、といった技法的な工夫を凝らしている。これらの技巧を、先に、ロベール・アンリコ監督による「アウル・クリーク橋の出来事」のアダプテーションを分析した研究方法（Sasaki, "Back to Owl Creek Bridge," 2015）を用いて精査する。

４．研究成果

2005 年の BBC 版 *Bleak House* は、ディケンズとソープオペラの関連性をきわめて強く意識したアダプテーションであった。イギリスの代表的なソープオペラ *EastEnders* の直前の時間帯に、この連続ドラマと同じ 1 回 30 分で放映されたからだ。そして、脚本を担当した Andrew Davies は、「もしディケンズが今日生きていたら、イーストエンダーズの台本を書いているだろう」と語った。この著名なシナリオ作家の発言はしばしば引用される。たしかに、ディケンズが現代のテレビドラマを観たら、自分も一枚かみたいと思うかもしれない。しかし、*EastEnders* よりは、もうちょっと高級なものに惹かれるはずだ。

21 世紀のテレビドラマで、 もっとも頻繁にディケンズと関連づけられるのは、David Simon の *The Wire* である。サイモンは制作局 HBO の潤沢な予算に助けられ、コマーシャルで寸断される心配がないケーブルテレビの特性を活かし、「大人」向きの内容で、キャラクターを発展させるのに十分な長さを持ったドラマ（1 シーズンは約 12 時間）を作るのに成功した。この場合、通常のテレビドラマとは異なり、毎週のエピソードはそれなりに完結した独立して味わうことのできる話というよりも、長い小説の一章として作られている。視聴者は、多くの人物が登場し、複数のプロット・ラインが絡み合いながら、（しかも通常のドラマのように親切な説明がないままに）展開する物語を読み解かねばならない。これが、サイモンの言う、「ヴィジュアル・ノヴェル」の意味するところである。

「ザ・ワイヤー」の物語はボルティモアの黒人麻薬ディーラーたちと彼らを取り締まる警察との駆け引きを中心に展開するのだが、同時に学校教育や市長選挙といった街全体にかかわる問

題も取り上げられる。一つの都市を下から上まですべての階層においてとらえようとする野心的な試みと言ってよい。従来の「刑事もの」とはまったく異なる、厳しい社会批評がその底辺にある。なるほど、長期間にわたって連載される、個性の強い人物がたくさん登場する社会性の強い都会劇、という点はたしかにディケンズを連想させる。

ただし、サイモンに言わせれば、ディケンズは甘い。ディケンズは確かに社会問題に切り込みはするが、その解決策はセンチメンタルでご都合主義的なものだ、と言うのである。だから、サイモンは最後の第５シーズンにわざわざ“The Dickensian Aspect”というタイトルのエピソードを挿入し、そのタイトルに厳しいアイロニーを込めている。このエピソードでは『ボルティモア・サン』紙の無能なエディターが若い記者に社会問題の記事を書かせようとする。その時に、エディターは「ディケンズ的側面」を忘れるなよ、と諭す。お涙頂戴式に書き上げろ、の謂である。そして、この「適切な」忠告のおかげで、巧みにでっちあげられた記事がピューリッツアー賞を受けるという皮肉な展開になっている。しかし、サイモンは認識していないのだが、上で触れた“The Dickensian Aspect”というエピソードでピューリッツアー賞を受けることになる記事が「ホームレス」についてのものであるのは、「家庭」にこだわり続けたディケンズを念頭に置くと、実はきわめて「ディケンズ的」なものなのである。

ディケンズやコリンズの活躍したメロドラマ小説の黄金時代には「純文学」、「スリラー」などといった分け隔てなどなかった。最上の小説はスリルに満ちていた――かつて T. S. エリオットはこう述べた。この「メロドラマ小説の黄金時代」が、21 世紀の今、復活しつつある。ただし、それを担うのは、従来の小説ではなく、小説的テレビドラマ、サイモンの言葉を借りれば、Visual Novel なのである。*The Wire* は、一つの大都市を描き出そうという意図と犯罪がらみのエキサイティングなプロットを結合した点で、まさしく現代版 *Bleak House* と言えよう。

今回収集した文献・映像資料に前回の科研費で集めた歴史アダプテーションの資料を結合すると、米国テレビドラマと我が国の歴史大河ドラマとの比較に新たな可能性が見えてきたので、これを将来の研究に結びつけたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Toru Sasaki	４．巻 49
２．論文標題 The ‘Conspiracy of Words’ in David Copperfield	５．発行年 2020年
３．雑誌名 The Cambridge Quarterly	６．最初と最後の頁 19-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1093/camqtly/bfz035	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Toru Sasaki	４．巻 114
２．論文標題 How Dickens Conceived Esther’s Narrative: An Hypothesis	５．発行年 2018年
３．雑誌名 The Dickensian	６．最初と最後の頁 16-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 佐々木　徹	４．巻 11
２．論文標題 クラウディウスとアダプテーション ― 歴史、小説、映画―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 英文学研究　支部統合号	６．最初と最後の頁 227-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20759/elsjregional.11.0_227	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 佐々木　徹
２．発表標題 『荒涼館』の気になるディテイル
３．学会等名 ディケンズ・フェロウシップ日本支部春季大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 佐々木　徹
２．発表標題 ヘンリー・ジェイムズの小説芸術と英国小説――ジョージ・エリオットを中心に
３．学会等名 日本アメリカ文学会関西支部臨時総会（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関